

# 研究通信

No. 21

村落研究會  
事務局

大阪市住吉区  
大坂市大社会  
研究室 室内

## 本年度大会を顧みて

(東京) 小池基之

本年度の大会は、昨年度の大会の課題を一層発展させし深化させるという意味で、同じ問題をまた共通課題としたわけであつたが、その結果は、昨年度の大会において残された問題の追求・説明に充分な成果があげられたとは、かならずしもいいがたいように思われる。それは、まず第一に、共同討議における私の「司会」の不手際による来するものといわねばならないが、その「不手際」は、共通課題「農家人口の変動と家族の構造」のなかで、とくに「家族の構造」に連なる面にお討議を十分に尽すべき分野があつたように思われるにもかかわらず、「社会学的な」側面からの問題提起を分析的な仕方でも展開し整理するための準備を欠いていたという、私自身の不勉強にもとづくものであつたことを、ここで改めて反省している次第である。懇談会席上における内山氏及びその他の方々によつてなされた、大会の「経済学的偏向」という批判的発言も、肯かされる根拠は充分にあつたのである。

「人口の影響を家族構造において見出すのに充分でなかつた」という批判は、「研究通信」第十八号大阪大会特輯所載の有賀先生の「知識を全体のものに」のなかにも指摘されているところである。日本の村が家族を構成の単位としており、家族が同時に生産の単位となつていくところからしても、家族の問題はいろいろの側面から追求されなければならないのは当然であるけれども、私達の

場合には、どうしても経済学的範囲にたよつて問題を処理していくということになり勝である。家族なら家族という一つの「対象」を徹底的に説明しようとする場合、ここまでは経済学者の分野でこのままでは社会学者の分野というような区分はない昔で、各方面の専門的な側面からの追求が相互に相補いあい深めあつていくところだ、この村落社会研究会の特色があるのだと思うし、大会の共同討議は共通の問題点をあきらかにする「場」であると同時に、同じ「対象」へのいろいろの接近の仕方の補充・綜合の「場」であるべきだと思ふのである。そして、そういうものとして、村落社会研究会の「共同討議」も、また独特の風格と雰囲気をもっている「懇談会」もあるのだと思うのである。

家族の問題は「集落」の問題につながりを持ち、また「集落」のなかで、いろいろな在り方をうけてつていく。一方ではいま農政の中心。乃至は単位として「集落」が改めて問題とされてきている所柄、「集落」を共通課題としてとりあげること、本年度のこされた問題を一層発展させる一つの方向ではないかと考えられる。「集落」の問題はすでに充分とありあげられた問題であるかもしれないが、なお具体的に究明するべき点が多いのではないだろうか。「集落」の諸課題のなかで家族構造はどういう規定をうけるのだろうかといつた問題は、昨年度大会の共同討議における井森氏の発言に關聯をもつてくるであろうし、また家族構造の変化が「集落」の形態に變化を及ぼして行く面もあるであろう。「集落」の発展・解体およびそこに見られる段階的諸類型が明らかになれば、それに作用する諸フクタアの分析から、「農家人口の変動と家族の構造」にも、連つた光があてられるのではないだろうか。本年度大会の結果から、莫然と、いまわめて莫然と「こんなことを考えてみるのだが、いずれにせよ、来年度の大会では、過日の懇談会席上での要望が充分にいれられて、そして私自身としては本年度の大会における自分自身の不勉強をとりかえす意味をも含めて、どのよう問題が發展していくかを、いまから深しみにし、かつ大いに期待をかけているものである。

# 第四回大会

日時 昭和三十一年一月二十五日  
場所 毎日新聞社 東京本社大会議室

課題 「農家人口の変動と家族の構造」

挨拶 毎日新聞人口問題調査会 松本 博

「研究報告」 司会 (東北大) 竹内利美

報告I 「積雪地方における農家人口の変動と家族の構造」 (新潟大) 中野芳彦

報告II 「瀬戸内海村における人口移動」香川真仲 多度津部高見島の実題

報告III 「村と人口現象」 梶井泉石 徹白村について

「共同討議」 司会 (慶応大) 小池基之

「協議と懇談」

第四回大会は去る十月廿五日(木)毎日新聞社東京本社講堂において、同社人口問題調査会との共催の下に開かれた。

参加人員百数十名内委員は在京者を主にして北海道・九州よりの参加者をも迎え約五百名であった。此に本大会も回を重ねること四回、仙台、大阪での大会を経てようやく村研の集りも共同研究の雰囲気も恒常化したと受けられるようになった。中野龍野、西村の三氏より、それぞれ合議に盛んだ報告が行われ、その内容は何れ年報で発表されることと思ふが、休憩後、小池基之氏の巧みな司会の下に、昨年から引続いた課題「農家人口の変動

と家族の構造」について活潑な討論がなされ引続いて懇親会をかねた協議会に移った。当日の協議会における重要な決定事項は次の如くである。

一、事務局は大阪市立大学文学部社会学研究室(中島龍太郎氏付)とする。事務委員は同研究室の中島龍太郎、山本登南氏とする。

一、振替口座は当分の間、使用を中止し、会費は前記事務局あて現金郵送とする。

一、来年度大会共同課題は五郊村や兼業農家等の問題が提出されたが、その決定は、事務局の世話により「研究通信」紙上での論議にゆずる。

一、課題委員、年報委員の選定は、事務局を中心として、人選に当る。

なお、此度の大会開催につき、共催者として会場の提供その池物心両面にわたる多大の御援助を、毎日新聞社人口問題調査会より得たことを感謝する。(文責 事務局 中島)

## 昭和三二年度 「共同研究課題」 の決定方針について

三二年度大会において未決定のまま保留された三二年度の「課題」について、十二月十日東京本郷学生会館において、前年度委員を中心として、有賀、小池、福武、竹内、中野、森岡、島崎、松原、山本の九委員参加の上次の如き方針で決定するように意見の一致をみた。

(1) 前年度までの課題の決定は、委員が實際

に行っている研究とは直接関係なく、いはば観念的、理想的な立場から行われた傾向があることを反省する。

(2) 従つて本年度はむしろ逆に委員の實際行っている研究を調査し、その結果の分析から課題を決定すること。

(3) アンケートは本年中に発送し、一月末までには整理した上、各道区委員の討議をへてなるべく早く決定すること。最終決定は関西側委員に一任。

## 年報第4輯の編輯 方針について

年報第4輯の編輯方針について十二月十日の打合せの結果、①年次大会の報告とできるだけ関係をもたすこと、②発行の関係上出版社の意見も考慮にいれること、③二条件をみたすため、次の方針を決定した。

- (1) 署名 農村過剰人口の存在形態。
- (2) 論文の区分及び執筆署名 (カソコ内は抜略)
  - A 越論(五〇枚)、小池基之、大内力、中島龍太郎、並木正吉、西村甲一。
  - B モノグラフ(四〇枚)、原宏、中野芳彦、龍野
- 〇 動向(一〇枚)、社会学、経済学、法律学、歴史学、地理学。
- (3) 編輯委員。有賀喜左衛門、小池基之、福武直、中野草、森岡清美、山本登
- (4) 抜削。執筆者に対して抜削を贈呈するよう努力すること。

仙台大会の雰囲気は違さねばならないという所感を誰からか聞いた。この言葉の中にはマンネリズムに陥入ろうとしている——村研は単にフオーマルな学会ではない筈だという意味が含まれていると思う。米年度の共同課題についても色々討議されて、或程度まで集約された形の中で今後に持越されたが、集約されたので小案を提起したい。

兼業農家乃至農家兼業のフィールド。ウィークは由米主として農業経済的分野からなされ、小池氏「日本農業構造論」、野尻氏「農民離村の実証的研究」を初め貴重な報告も少なくない。然し比較可能な同一次的な文献はそう多くないと言わねばならぬ。況んや社会学プロパーにおいては見るべきものは殆んどないといつても過言ではない。にも拘らず、最近の研究報告はとみに兼業農家乃至農家兼業の問題を副次的、派生的にせよ扱つたものが多くなつた。地理学会でも昨年の共同課題として「近郊村」を取上げたようである。

尤も兼業農家乃至農家兼業といつても農林統計でいう概念は極めてドライに扱つて来ているが、これは飽くまでも「農家」という枠に入れたものが農業を専業としないうで他産業を兼ねる、即ち「農家」が農業以外の産業を兼ねるといふ規定の中で扱われている。従つて農業を専業とする農家に対比するといふ基点に立つて「農家」として操作されている。然るに農業を兼業するもの、つまり「農

家」という枠を適用する以前の課題を考へることが必要である。即ち一反以上、五畝以上の産業を兼業している所謂「兼業農家」であるといふような考え方はなく、「農家」という概念を所謂「専業農家」だけに限定して考へてみる。此がその「農家」以外にも農業を兼業している家族がある。この家族が農村において、特に *Inter-tribal* の地位、役割、機能を実現しているか、果して農家であるか否か、農家であるとするれば如何様にして農家であるのか、又所謂専業との絡み合いはどうかの点に立つて考へ、所謂「兼業農家」の概念規定を再考する。このような意味を含めて近郊村における所謂兼業農家の分析を提案する。各大学、研究機関の所在地と会員の在在との関係から言つても継続調査も容易であらうと思う。そしてこの課題も二年継続とし、来年は敢えて調査のデザインを定めな

いで、大会における研究報告をまつて討論の上、再来年はデザインを決めるか又はアイテムを統一するという方法を探つてはどうだろうか。村研のような集りに、かゝる共同研究を推し進める全国的に比較研究出来る方針と資料を生みだすべきだと思ふ。

ブラジル調査行経感

塚本哲人

ブラジルに在る日本移民の同化に關する実地調査を目標に彼の地へ出かけたのは、昭和三十年九月だった。往路四五日間は、移民船に便乗して新移民の面影に追われ、十一月に彼の地へ上陸してからは、七ヶ所の地点を総勢五人の団員が適宜に分担して、三ヶ月間にわたつて調査した。その後、移民問題のセミナーを先方の大学側と行い、昭和三十一年四月に帰國した。

この調査行は、意外なほどに全面にわたつて成果を得たと思われ、私にとつてとりわけ強く印象づけられたのは、自分の分担した七地点中の二ヶ所の調査である。この二ヶ所は、ともに南ブラジルのパラナ州の北部地方、北パラナと通称されるコーヒーの新地帯にあつた。一九五一年に原始林に莽が入られたという開拓最前線の一地帯と、二十数年の発展の歴史をもつ日本人多数が集團居住している植民地である。

この二地点の調査に當つて、私は、何よりも先に、対象地域に成立している郡部共同体全体の構造分析を行い、その過程乃至結果から居住日本人の共同体内部における地位と役割を見定めてゆき、さらに意識その他生活様式一般の考察を加えて、同化問題の展望を得るという方針をとつた。アメリカ農村に通じるこの種の郡部共同体の構造分析に對して、強い関心をもつていたからには、ほかならぬ。

さて、アメリカ農村社会学に關する知識を基礎に、見聞きしたブラジルに對する知識の理解を附加しただけの準備で、最初飛び込んだ開拓前線の地域の調査一ヶ月は、たゞ

夢中だったといえよう。州政府から下づけをうけた原始林、その面積は日本風にいうと約三万五千町歩が、一九五一年から成る土地会社によつて開発されつゝある。開発の拠点であり、周囲の農場地帯の中心とすべく建設された市街地には、すでに三百五十世帯余、千八百人位の人が移住してきて、一応、田舎町の外観を呈している。農場地帯として指定されている区域の原始林は、三分一以上焼き払われてゴーストの植付けがすんでいる。着々と、いわゆる郡部共同体が生成されつゝある地域だった。

こゝには、日本人は市街地に十数ヶ家族、農場地帯に三十家族が移入しているだけだ。あの西部州の舞合さながらの發展と勢のなかでは、開発に当つている土地会社の協力とジョブを運給し通訳を勤めてくれる通年輩の日本人準一世の助力が有難かつた。また、見るもの聞くものが全容面白かつた。国内の商業資本が行う開発方式、そこに計画されている郡部共同体の底辺的種組み、また、その計画にそつて移入してくる人々の性格、その人々が市街地において、農場地帯において構成する階層の關係、そして、土地会社の支配を中心とした政治構造、さらに、これらが展開をはじめてゆく諸相などを勉強した。とくに、「出現しつゝある郡部共同体」ということに留意していたつもりである。

次の一ヶ月間は、日本系の土地会社が一九三〇年代に開発に着手し、現在約四万二千町歩の土地に三万二千人ほどの人口を算する植民地に、一ヶ月間をすごした。全人口の約三

分の一が日本人乃至日系人だし、右の調査地へ転出した日本人入大学の居住地だったので調査地とした。しかし、開発がほぼ完了し、農産物の安定をみた地域という点で限りない興味があつた。二十数年の間にどのような展開をとげ、どんな様相をもつようになるのかを、前事例との対比で考えてみた。郡部共同体の成立と発展の骨組みをうかがいたかつたからだ。

以上のような期待で仕事をしてきた。しかし、二事例からでは、勿論、充分なこととはわからない。二地点の調査中にも、対照的とみられる箇所をもつ隣接地を通つてもみたが。月並みに、ブラジルと一口にいつても日本の二十数倍の広さだからとつうことになりそう。いくらジョブを足にしていたといつても現地の人々の協力を得たといつても、二調査地は、私一人の調査としては広く大きかつたしたがつてこゝで、一口や二口で郡部共同体について説くことはむづかしい。卒直なところ、二事例の調査結果をかなり細かく記述した報告書が本屋に渡つているので、それを御覧いたゞいて、御教示を賜わりたいと思つている。

なお、主題とした日本移民の問題で得たものの若干を挙げれば、次のようになる。二十世紀の初頭までアメリカにも現存していたという「農業における階層上昇の様子」は、今もブラジルには豊に用意されている。これが外国移民の魅力だし、「黄銀の格差」を特色とする北米と区別するブラジル移民の型を形成する基軸でもある。日本移民の問題も、多

くはこの「梯子」をめくつて発生している。昇る速度の緩急、昇り方の姿勢などに、いわゆる日本農民の社会的性格がどきどきにちみ出てくると、同化が指適される。しかも、現在この「梯子」の段でいえば、多くが小規模主層になつている日本人は、家族労力を基幹とする経営をし、独立度の自由をもつ故に日本農民の性格は表現され易い。それにしても、特殊な食物、宗教、親族組織、さらに、旧来の家族制度と農本主義の意識は、益々人々の心をとらえているものであると感心した

### ヨーロッパ掃き寄せ

有賀 豊左衛門

十一月八日に羽田に降りました。五日にローマを立つ時は機嫌の悪くなりそう気分がたちこめて、ローマでもものしい有様でした。ローマの学生達は *La Indigesta* の *Suor* という標識をかかげ、ソ連及び英仏に対する反対デモを連日やつていました。私は十月の月末にアテネをへてカイロにはいる計画をしていましたが、ついにこの計画はおちやんになつたのは実に残念でした。学生ばかりでなくイタリアの人達は戦争に強烈に反対しているのです。今のイタリアは戦後の傷も癒えて、輝やかしい復興の途上にあるのですから、戦争はいやだという気持ちの強いのもよく理解できます。イタリアは乞食が多いとか、人気が悪いとか、にせ札を

つかまされるところを日本から出る時に聞いていましたが、兎ると聞くとは大抵がいつか感じがしました。私のような短い期間の旅行中には現在のイタリアの政治のことなどわかりませんが、しかしイタリア政府が今行っている農地改革は日本のそれとは段々がいの内容を持つていらしいことを聞いていただけでも、現在のイタリアに乞食なども余り見られないこと、關係がありそうに思いました。

イタリアで行われている農地改革は全国一斉に行つているのでなく、地区を部分的にきめて、地主から政府で土地を買い上げ、政府の力で土地改良を行いつつ、農協同組合を中心に各戸経営の充実を計り、農民から生産物の供出をさせることにより長年期の在賦で農民に土地を売却す仕組みのようです。イタリアでは全国に亘つてまだ大地主も存在していませんが、それらの大地主所有をこの方法で次第に自営農民の手に引渡そうとする遠大な計画が現在の社会民主的な中間政黨三派の連立内閣によつて準備されているのです。

その一地区として設定されたエンテ。マレンマはポローマからフィレンツェに至る西海岸に面したかなり広い地区ですが、ここではすでに農民に売り渡されつゝある土地も相当あると聞きました。この地区は一戸当りの割当耕地が最も多いのですが、ほゞ一四エーカー余になつてゐるのは驚くべきことです。

シテリア地区は一寸少く四エーカー余と統計に見られましたが、これらは日本の農地改革がただ所有權の移転だけの事務をしていただけにすぎないの比喩すると、前述のように土

地改良や経営に對して政府がもつと親切な、立入つた尽力をして、農協中心の農村建設を行つてゐることに注目せざるを得ないので、日本の農地改革が自主的のものでなかつたからといへばそれまでですが、農地改革が福祉

社会の建設にとつて当然の条件であることを考えるなら、イタリアの農地改革にはいろいろな意味で教えられる所が多いと思うのです。私は農村や農家をつぶさに見る機会もなかつたので、イタリアの農業のこともよくわからないのです。しかし私の見たかぎりのことといつても日本の農業が技術的にイタリアに劣つてゐることはとも思われぬのです。ロンバルディアの米作は季節はずれで見られませんが、ローマ郊外の麦畑など見ても、石ころの多い粗野な草地にバラ播きの状態を見れば、日本の百姓は笑ひ出すでしょう。ロンバルディアからトスカニーに來る途中で、畑の境に雑草を植えて、それに鋤藪をからませた恰好なんか、雑草に見える作り方です。それに畑の間に沢山の草地があつて、羊や牛が草を食べてゐるのを見たら、日本の百姓はもつたないと思ふにちがひないのです。これらは休耕地にもなるのだから、日本のように多肥栽培はやらぬようです。大動力機械が田中畑の中で活動してゐるわけでもないらしいし、畜力耕耘も多いといふことだし、それは私の眼でも眺めたことでした。

私は農業技術の優劣をそういう現象の上できめて見た所でナンセンスだといふことをスペインを訪れた時から痛切に感ずるようになってきました。私はこのころ旅行中ですから、北

政諸國を見て歩いてゐる時はさほどにも感じなかつたというより、その農村でも農家でも、日本の農村や農家よりむしろはしく裕福に見えたので、同列に比較するといふ氣持がほとんど湧いて來ませんでした。ただ國によつて農業の内容に相当ちがひがあるのに、賢つた所が私の見た部分はほんのわずかであるし、眼で見える表面的な事柄ばかりですから、本当のことがわかつてゐるわけではないのです。その程度で比較して見ただけでも、例えばイギリスでは、ロンドンの近郊においても牧場用の草地は沢山に見られても、野菜畑はあまり見られませんでした。ロンドンの八百やには外國の野菜や果物がいろいろならんでゐるのを見ましたが、さもありませんと思われ

（一三四）

ました。オランダの西部の海岸地方は有名なチューリップ栽培地ですが、落花生などの畑もあり、敏説はイギリスとはずいぶんちがつていました。じやが芋はドイツやイギリスにも輸出されると聞きました。また米は「苦い米」で知られたイタリアのロンバルディアや南スペインの特産であり、付産額も南歐のものですが、米も此項では北歐で沢山消費されてゐるので、北歐に送つてまされてゐるのです。其他この種の事柄をあげればきりはありませんし、私より広くヨーロッパを歩いてゐる人はもつとよく知つてゐるはずですから、私はさういふ事柄のままとつた知識もなぐて、各國を歩きながら、とりとめもなく見たり、聞いた

りしてゐる間に、さういふ事實が私の頭の中にだんだんたまつて來ました。そして國々

よつて農産物に特産的なものがあつて、それがヨーロッパ諸國の間に相互に深く交流し、有無相違じていることを知りました。日本でもビルマやタイから米を買つてゐるし、台湾から砂糖が来たりしてゐますから、農産物や農産加工品の輸入や交流が全然ないことはありませんが、ヨーロッパではもつと多種類の農産物産が諸國にもつと深く交流してゐるように見えます。こういうことを農産物ばかりで見ても仕方がないし、またこれをヨーロッパ諸國の間ばかりで考えて見ても意味は少ないのですが、ともかく農産物のあるもののようにナマのものでする交流が盛んだということとは私には意外でありました。日本では野菜まで朝鮮や中國から買ふことは考えられないと思ひます。こういうことの結果各産品の農産の上に適地適作の傾向が強められることになつて来たかと思ふのです。適地適作といつても自然的な条件ばかりで考へてはならないのですが、ともかくそういうことから、各國において作物の種類も比較的少くすむことにもなるし、それは農地の比較的潤沢であるという条件と相まつてヨーロッパの農産の条件をよくしてゐるように思われるのです。スペインは氣候風土の条件がひどく悪いので、大半は琉球原のような情狀を呈してあり、そこには子の子をちらしたように羊が群れてゐるのですが、こんな地方ですら百姓の生活には何かゆとりがありそうに見えるのです。北歐にくらべて生活低度が高いことは見ればわかるのですが、スペイン流のおそろしく悠長な、時間を無視したような生活をして、音楽や踊

などの楽しみも相当大きいものを見ると、そんなセソセと仿かなくとも良い理由がどの辺の所にあるかという性質がしてならないのです。イタリヤに来てても氣候の条件はひどく乾燥してゐて、日本より悪いように思われます。台風はないとのことですが、ともかく畑のこしらえから栽培の方法も、どう見ても荒つぱいものです。大きな畑に石がごろごろしてゐて整地も十分ではないことや、麦のばらまきなどを見るに日本の百姓が笑ひ出すだろうと思ひますが、これですましていられる農等の方がどの位幸福かわからないと思ひます。パリで、ヤイブル所産のモネの一つの酒を見ました。その酒は百姓女でない二人の婦人が子供をつれて麦畑の畔道を下りて来る酒でした。その麦畑の中はひなげしの赤い花が変にまじつて沢山咲いてゐるのです。私はこれと同じ情狀をロンドンからストラットフォード・オング・エーヴオンへ行くと遊ばたで沢山見ました。田舎派の創始者モネは私と同じ方ではありませんが、私には彼の多ツチの新しい工夫が當時いかにすばらしいものであつたか、また今日でもそれはいきいきしてゐることに心を打たれましたが、ヨーロッパの農作は日本の百姓のように益利的でなくとも良い十分の理由があるのだということをおぼわぬわけには行きませんでした。

ヨーロッパの農産は各國によつて今のべたようなヴァイアエティを見ることはできませんが、また他面でも地に結びついて存在する共通性の著しいのにも驚かされました。それは畑をめぐつて低がつてゐる草地——牧場——と麦の栽培とでもあります。こんなことを私が訪かなくてもわかりましたことではしようが、私は今迄聞いていただけで、はじめに見て驚いたのですから、驚いたことを書きたいと思つたまでです。畑と同じ位か、國によつてはそれよりも花の草地を切りかけて、酪農をやつて行かれるということなのです。日本でも酪農の必要が相当強く呼ばれて来たと思ふのですが、少くとも一般の小農のやつてゐる酪農——給養といえるかどうかとも疑問ですが——なんか困難な状態におかれてゐます。もつと正確にいつたら多くの百姓はそこまで手が出ないのだと思ひます。そういう地盤がまだできていないといつてよいでしょうか。牛馬や羊を飼うのには飼料が必要なのですが、高い飼料を買ふのではやりきれないと思ひます。草地を持つために田畑をつぶすほど、田畑の余裕を持たないようです。植額大の耕地の上で多種類の作物を複雑なまでに輪作しなければならぬような条件では、少数作物に集中することはほとんどできないようです。だから未明から夜まで刻苦勉勵の労働をしなければならず、その技術も、多肥の上に、莖をため、葉を撫でさする名人芸のようなものにさえならなければならぬといふことになると思われます。それでも生活は苦しいといわれてゐます。そして農村は生活のたのしみも少いといわれてゐます。農地改革以後生活のよくなつた人も少くはありませんが、田畑を草地に換へる余裕のないことは明かでありませぬ。一部の人は山林の解放や農家の集团的な経営に持つてゆくことに根本的な解決

策があることを主張していますが、一国内で解決し得る限度はもつと良い条件を持つて困です。これらも有効な解決策となり得るかも知れませんが、私は国際的な深い連帯関係を地盤としなくては中途半端なものに終りそうな気がしてならないのです。そういう連帯関係は日本では今迄極めて貧弱であつたと思います。

私はスペインを見てから、ヨーロッパの農業と日本の農業とのちがいを考えて見たいという気持ちになりました。また考えることができそうに思いました。もちろんこれからいろいろの資料を集めるのでなければ解答はできないと思いますが、そのちがいはそれが立つている地盤のちがいはあるまいかと思うようになりまして。その一つの表れは前にふれた農産物のヨーロッパ諸国間における交流の中に見出される連帯関係の組織であると思えますが、これは共栄圏というには余りに諸国家の利害が一致してはいないので。しかしそれでもかなり深い連帯関係を持つていふことを注意してよいようです。それと共にこれはたゞ農業の關係だと見ることも正しいとは思われません。やはりヨーロッパの全体の経済構造。文化構造と密接に結びついていると見るべきだと思われます。もう一つはヨーロッパとヨーロッパの外部との關係をその地盤として見なければならぬと思ひます。これらのことは私がおそまきに気づいたというにすぎないので、改まつて申上げるほどのことではないかも知れませんが、おそまきに私

の思うことはヨーロッパが近世以来獲得した政治的・経済的地盤は今日相当大きく改訂されつつあるとしても、そのすべては簡単にくずれるものとは思われぬことです。そういう地盤に支えられて広い草地在り成立したことを考えてもよいと思ひます。デナムマータの繁栄についてももちろんそうであると思ひます。ビレネー山脈以南はヨーロッパでなくとも通例にわたっているスペインもそういう地盤の上に「焼野原」を支えて、その中で彼方の生活を創り出したことを考えられぬだろうかと思ひます。思想の貧しい一旅行者は自問自答して居るのです。(一九五六年二月七日記)

**版 知 告**

**年報才重輯「村落共同体の構造分析」について**

年報は我々村研の研究発表の場として、年次大会・村研通信と共に重要な我々の共同研究の場であるばかりでなく、対外的に成果を問う唯一の手段でもある。それゆゑ、その刊行継続は何としても保持してゆかなければならぬ仕事である。広く読まれるということもその大切な基礎となる。その充れ行き如何は年報委員会のみならず、全会員の関心事でなければならぬ。各位の御尽力を切に希望する。

才重輯は幸い甚だ好評で、発売当日たる大会席上だけでも時潮社が用意して来た四〇冊を売りつくしたようであつた。なお、協議会の席上で、研究室ないし研究所単位において会費から取りまとめて時潮社あて申込みを受けたのに対し、十一ヶ所の大層ないし研究所よりそれぞれ五冊から廿五冊あての申込みを得た。同様の申込みは今後も受け付けてもらえ

る所であり、前述の如く、あるいは会費を代表者として学生等の分を一括して研究室などの購入希望をまとめて時潮社あて申出られれば、会員自身が個人で申込みの場合と同様に特別割引価格三五〇円(定価四二〇円)で買うことが出来るよう交渉ができてゐる。

- 大会以降の会費納入者
- 三〇年度分 塚本哲人 北川隆吉 並木正吉 大西正美 中村治兵衛 島崎隆 齊藤吉雄 横田忠夫 浜島明 加藤正泰
  - 三〇年度及び三一年度分 中村吉治 松村安一 藤原武夫 松原治郎 内山政昭 大内義明 二宮哲夫 西川善介 河井和夫 川越淳一 野尻重雄 大山彦一 大藏寿一
  - 三一年度分 1 安藤愛一郎 9 本下彰 17 吉井廣興 篠岡清美 2 中田実 10 岡田謙 18 堀武直 26 藤原昌彦 3 河野善哉 11 藤本三子 寺澤服部貞則 27 藤原八洲次郎 4 米林勇 12 村松一 20 山野芳彦 28 小川徹 5 伊藤章 13 原宏 21 後村天 29 山本登 6 中島隆太郎 14 野村清 22 神谷力 7 牧野由郎 15 中野卓 23 藤野重男 8 船橋善之 16 竹内利美 24 小池善之
- 大会における新入会申込者
- 伊藤章 榎林省農林技術研究所
  - 藤本三子 東京都北区西ヶ原二ノ一
  - 仙台市片平町七六番地
  - 仙台北大教育学部研究室
  - 仙台市原町南目二軒茶屋南四七番地
  - 海老原三三
  - 牧野由明 愛知大学
  - 豊橋市岩田村一八の一
  - 河津哲也 早稲田大学文学部社会学研究室
  - 中田実 名古屋大学文学部社会学部
  - 愛知縣豊川市平尾町中十一
  - 会費奨励通知 埼玉大学文学部社会学部
  - 菅川剛一 埼玉大学文学部社会学部
  - 公団住宅 6号館65号に移動

# 会 計 報 告 (1955.10 ~ 56.10)

## 1) 収 入

繰越金	29,578円
会費収入	6,000円
預金利子	205円
計	35,783円

## 2) 支 出

年報編集費(東京・一般連絡費共)	3,034円
研究通信印刷費(紙共)	19,650円
全上雑誌費	5,956円
大会出席問合ハガキ代(印刷共)	1,400円
討論記録作製謝金(複本共)	3,000円
編集その他連絡通信費	1,250円
封筒その他雑費	760円
計	35,050円

## 3) 繰越金(次期繰越金)

	733円
内 口應預金	239円
現 金	494円

(備 考)

研究通信印刷費と印刷費

NO. 18	計	3550+	1620=	5170
NO. 19		3850+	1440=	5290
NO. 20		3650+	1456=	5106
別紙 1		8600+	1440=	10040
計		19650+	5956=	25606

才四回大会 特別会計

### 収入の部

毎日新聞社より(討論謝金)	15,000円
会費 (1年分)	11,100円
(2年分)	7,200円
大会参加費	2,250円
夕食費(33人)	4,950円
収入合計	40,500円

### 支出の部

講師謝金*	3,000円
夕食35・昼食10	4,500円
ビール2打	2,592円
ツマミ	355円
支出合計	10,447円

残金(次年度経常費へ繰入れ)

30,053円

◎事務局より  
才四回大会で事務局をひき受けることになりましたので、よろしく御援助を願います。本号はとりあえず連絡程度のものになりましたが、同封の会員意見を乗約し、もつと内容の多彩な通信を送りたいと思つていきますので、積極的な御意向をどしどしお寄せ下さい。尚、会議は今後振替を用いず、直接事務局宛御送附すること、年報は直接出版元時潮社宛村研会員である旨附記して御申込み下さい。(事務局 中島)

〔一三三〕